平成 27 年 3 月 31 日

平成26年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 （該当に〇）	海外共同　・　共同研究　・　個人研究	
研究代表者氏名 所属職名	岸田泰子 看護学部　教授	
研究課題名	思春期の子どもをもつ親支援の方策	
研究分担者氏名	所属職名	役割分担
研究期間	平成２６年４月１日　～　平成２７年３月３１日	
海外共同研究を実施することになった経緯（海外共同のみ）		
研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書 なし		

研究実績の概要（1）

【研究背景・経緯】

わが国では乳幼児期の子育て支援対策が豊富にある中で、就学期以降の子どもをもつ家族支援は圧倒的に少ない。欧米では学童期から思春期にかけての養育支援プログラムの歴史は古く、構造化され、組織的に実践されているものが散見される。文化慣習のちがいがあり、海外のプログラムをそのまま援用することには無理があるが、これらを参考にした国内での独自の支援プログラムを開発することができれば、親たちに子どもの養育に関するヒントや指針を示すことにつながり、そのことによる親子の健康増進効果も期待でき、より具体的な支援の提供となり得ると考えた。そこで本研究では思春期の子どもをもつ親に焦点をあて、養育のための支援と家族の健康管理を目的としたプログラムを企画、運営し、健康増進のための介入を行う。

すなわち本研究は、思春期の子どもをもつ親のための健康教育を盛り込んだ養育支援プログラムを展開し、その効果の検証を行うアクションリサーチである。すでに、岸田は科学研究費（平成23年度終了、研究代表者　岸田泰子、基盤研究C、課題番号21592840）の助成により、本研究の基盤となる親グループへの短期的介入を行った。その後もこの介入を継続しており、この実績を生かして本研究では、介入の中長期的効果について検証する。

【研究目的】

本研究は、思春期の子どもとその家族の健康増進とセルフケア能力の向上を目指すことを目的とし、子どもとその家族に必要な健康情報を盛り込んだ参加型の親支援プログラムを実践し、3年にわたる中長期的効果を検証する。

【研究方法】

1．対象者

研究代表者岸田が平成23年から行ってきた「思春期の親サロン」の参加者のうち、本研究への参加に同意が得られた者、12 名であった。参加者の条件として、思春期の子ども（おおむね中学生、高校生）をもつ親とした。これまでのサロンの参加者に対して、電子メールを利用して、今回の研究の主旨を文書で説明し、同意を得た。途中辞退も可能であることも説明した。今回の介入に同意が得られる場合のみ、以後のサロンに参加していただいた。本サロンは、最初の公募の段階で研究として取り組んでいることを説明して参加を受けつけており、すべての参加者から同意が得られた。

2．調査対象期間

平成26年7月から平成27年3月であった。

3．方法

参加者へのインタビューとこれまでの実践により思春期の子どもの健康問題や養育問題を抽出して取り上げ、優先順位をつけ、これらをトピックスとしてディスカッションを行う形式での健康教育プログラムを作成した。必要に応じて、専門家による講話を織り交ぜて、参加型の健康教育プログラムとして、展開した。プログラムは月1回（基本的に第2土曜日　14：00～16：00）、場所はA大学の1室を使用した。毎回の実施において、ファシリテーターとして参加した研究者が進行記録を筆記により作成した。

研究実績の概要（2）

1）実施した健康教育の内容

取り扱ったテーマは、子どもと学校、子どもと家族の健康、子どもとメディア、家族の過ごし方、親役割診断、10 年後の子どもと家族、更年期の話、子育てを振り返る、思春期の子どもとのかかわり方、子どもとメンタルヘルス、であった。そのうち、専門家による講話を 3 回取り入れた。

2）分析方法

プログラム評価として、進行記録の分析を行った。その分析は質的帰納的方法により、進行記録の中から、参加によって得られた変化、参加によって影響を受けたと考えられる態度、行動に関する内容を抽出し、意味ある内容ごとに分類し、コード化、カテゴリー化した。

4．倫理的配慮

調査対象期間のはじめに電子メールにて研究の主旨を説明し、同意が得られる場合には返信するよう伝えた。また同意が得られる場合、それ以降のサロンへの参加を促し、参加者を対象として同意書を交わした。参加者には、本研究の主旨、プライバシーの保護、途中辞退も可能であること、不参加の場合も不利益はないことを説明し、同意を得た。なお本研究にあたり、共立女子大学研究倫理審査委員会の承認を得た。（承認番号 KWU-IRBA#14057）

【結果】

期間中に 8 回のサロンを開催し、のべ 66 名の参加者があった。1 回あたりの平均参加者数は 6 名であった。

進行記録の内容を分析した結果、サロンを運営したことによる中長期的効果として、3 つのカテゴリーが抽出された。以下〔　〕はカテゴリーを示す。参加者らはサロンを〔日常から離れ、安心して話ができる場〕と感じており、そこでは家族や自分自身のことを振り返り、また相談をもできるという関係性が形成され〔安全性が確保された中で、深い話ができ（る）〕ていた。そして、数年にわたるサロンの開催中に子どもたちも成長したが、参加者自身も〔自身を振り返り、問題を乗り越えることによる親自身の成長〕を遂げていることがわかった。

【考察】

家族や近隣、学校関係者との関係性の中だけでは話せないプライベートな内容や、同年代の子どもをもつ親同士であるからこそ分かり合える内容について親同士が語り合い、自省することで、年月を経た子どもの成長とともに親自身も成長し、問題を乗り越える様子に直面することができた。サロンの運営を始めて最初の 1 年以内では見られなかったような深い話ができるようになったのは、この場が安心でき、安全性が確保されている、仲間の人となりがある程度わかり、グループとしての成長も遂げられていたことから、サロンを運営した中長期的効果は良好であったと評価できる。思春期の子どもをもつ親への支援が数少ない中で、このような場が親たちにとって有効な社会資源の 1 つとなる可能性が示唆される結果が得られた。新たなコミュニティーとしてこのような形での支援を地域で活用されることが期待される。